

「2025年度香港中文大学サマープログラム派遣参加報告書」

京都大学文学部1年 篠原 丈二

① 学習成果

中国語の学習経験がほとんどないままに、香港での中国語学習を始めたので、クラス分けにおいては当然初級のクラスに配属された。初級のクラスは日本人が私以外にほとんどおらず、欧米の国々や韓国からの参加者が多かった。この環境において、初めはうまくやっていけるのか大変不安であったが、これが私の国際理解への意欲を高めることになった契機であったと今は確信している。これには大きく分けて2つ理由が存在する。1つめは英語での会話である。授業は英語で行われるし、授業内でのペア練習においては、中国語をお互いに英語で即座に教え合う必要性が存在していたので、大学受験の勉強で学んできたような文章の組み立てでは、全く歯が立たなかった。ここにおいてコミュニケーションとしての英語を肌で体感できたし、周りの彼らから会話で使えるフレーズを盗めたのは大変良かった。英語への態度が少し変わった気がする。2つ目は中国語での会話である。お互いに中国語を初めて学ぶ間柄であるから、まったく遠慮は要らないし、そして何より重要だったと思うのが、習うものが全て、生きることに直結する内容だったことである。すなわち、複雑な論を展開するのではなく、自分の思ったことをストレートに伝えられる環境であったのである。それにより、このプログラムに参加する前は『どうやったら上手く話せるだろうか』と考えていた私が、『話すに重要なのは気持ちであり上手さではない』と考えを一新させることができたのだと私は思う。

また、このような日本から地理的にも文化的にも離れた場所で、異なるバックボーンを持つ人々と交流することは、自分の正直な感想を言うと、楽しいことばかりではなかった。上手くコミュニケーションが取れなかったたり、お互いのジョークが不発に終わったりと、なかなか容易に事は進まなかったけれども、それを通して、自分は確かに成長できたのだと感ずることができたし、彼らとはそれを以って20日という短い時間ではあったが分かり合うことができたのだと思う。日本に居続けることは確かに心地がいい。けれどもそこから成長は生まれない。そう私は気づかされ、これからも積極的にこのようなプログラムや留学に参加したいと思うようになった。

② 海外での経験

プログラム以外での経験において、私の中で印象に残っているものがある。授業が終わるとバスに乗って寮に帰るのだが、ある日バスに揺られていた時、スマホがないことに気が付いた。これはまずいと思い、教室のほうまで引き返したところ、清掃員の方がいた。彼女は私に話しかけてくれるのだが、どうやら英語は一切で、怒涛の普通語が飛んできたのだが、その時の自分の技能（今も当然そうであるが）では全く聞き取れず。普段の私ならば、適当にごまかしてしまうのだが、スマホがないという一大事にそんなことは言っていられない。そこで何とか今まで習ってきた中国語で伝えようすると、彼女は優しい表現で返してくれて、どうにか自分の意図を察してくれたようで、一緒に探してくれ、その結果スマホを見つけることができた。別れ際に感謝とバイバイを言うと、笑ってバイバイを返してくれた。気持ちがいかにも重要かを感じさせられた出来事であった。

③ プログラム内容

上記で述べた通り、3週間ほど英語で中国語（普通語）を学習した。中国語学習では、先生の口真似をすることが多かったように思う。テストや宿題は頻繁に課されたので、必死になって取り組む必要があった。また、授業外においては、現地学生との交流や香港内でのツアーを通じ、香港への理解を高めた。

④ 進路への影響

日本でずっと学び続けようと以前は考えていたのだが、自分を真に成長させるために、アジアの地に限らず、あまり親しみのない地に乗り込んでみたいと思った。また、自分はまだ1回生であり、将来のことは本当に漠然としているのだけれども、①に書いた“気持ち”を広める活動をしたいと思った。それにより、世界が少しでもハッピーになったらと思う。